待ちわびて・・・

陽は傾き、秋の虫が涼やかに鳴きとおします
過ぎ去った夏、
大イベントのお盆も過去の出来事となりました

苦もなく楽もなくとは成仏の世界
それほどに浄化されている霊は果たして・・・？
成仏の程度も各人各様なのかもしれません

お盆の墓地は嬉しくもあり、寂しくもある処
様々なお墓模様が見えます
無事に永代供養墓に納まって安堵の気持ちすら伝わる風景
溢れる花や供物に埋もれてにこやかにすら見えるお墓
訪ねる者もなく、寂しさに沈むお墓
あまりにも対照的でリアルな風景です
墓石といえども、雄弁に語ります

霊魂不滅であれば
おそらくお墓の前に佇み、
家族や子孫の来るのを待ちわびる姿があるでしょう
そして、墓参で賑やかな通りの陰で
すすり泣く霊の声も聞こえそうです
来たるお盆に望みをつないで、
また、草場の陰へと消えてゆくのでしょうか

お盆の13日
お経の一片で少しでも癒やされればと、
それらのお墓を巡ります

死後、忘れ去られるほど寂しいことはないと
しみじみと思います
せめて年に一度、恩讐を超えて
霊を訪ね寂しさをぬぐって差しあげる
日本人の、家族愛の
こころの原点ではなっかたでしょうか

感性は仏性なのかもしれない

足元の名もなき花を見て
愛おしさを覚えることがある
小さくても、じっと冬に耐えてきたチカラ
精いっぱい咲いて陽を浴びている
雑草と呼ばれながらも、その姿は
花壇の花と価値は変わらない
そう気付いて花を見つめている

動物園の様々な動物が愛くるしい顔をして戯れている
が、その顔は、その目は時に遠くを見つめている
生まれ育った故郷か、草原を渡る風を待っているのか
彼らの啼き声は慟哭かもしれない
運命に諦めを重ねた顔にも見えてくる
そう思って見ていると沈んだ風景となる

自然を織りなす千の草木
そこに息づく様々な生き物も
等しくいのちを分かち合い、ドラマを展開している
人間だけの世界ではないことが
彼らの一途な姿から見えてくる

視点を変えると
気付かなかったものが浮かび上がってくる
見る目を変える、そこには感性が必要
感性こそ、こころのぬくもり
豊かな感情も思いやりも 感性のなせる技ではないのか
感性は 仏性なのかもしれない
そう思えてきた

川のせせらぎ　風のささやき　光の舞　草木の輝き
すべては感性の源
癒やしの源流

子どものこころに感性を育てよう
子どもを連れ出して大自然の中で ・・・

どこまで変わりゆくのでしょう

大型連休には
国民的な大移動で故郷は久々に賑わいました
田舎は子どもたちの声で 少しは元気になったのかな
でも、人の集まるところは高齢者ばかりが目立ちました
連休も去り、潮が引いた後の寂しさはことばになりませんが
でもこれからは新緑と力強い太陽が頑張ってくれそうです

時々刻々と変わるは諸行無常の姿でしょうが
激しい人口減少で田舎は激変しはじめました
限界集落が点から面へと広がろうとしています
小さな村、地域社会は共同作業が難しい現状
お祭りや運動会も言うに及ばず
お寺もそのあおりを受け始めています

「去年はこうだったのに」とつぶやくことは
無意味なほどに年々変わってきます
マンサクの開花が1ヶ月遅れ
山桜はよく咲きましたが
春ゼミの鳴き始めも1ヶ月遅れ
今年は筍が出ません
晴天が 10 日以上も続くのも不思議なこと
あれも変！これもおかしい！
自然界すべてのデータがリセットされたよう

見事だったキリシマなど各種のツツジが終わりを告げ
いよいよサツキの番が来ました
こんな気候ですから今年も立派に咲いてくれるのかな
気がかりです

境内の樹木にも異変が
地下水の流れが変わったようです
水量が増えたところの樹木は茂りが増し
葉が倍の大きさに成長を続けてますが
水量の減ったところの木は葉の出も遅く
1 ／ 2 の大きさにしかなりせん
樹齢 250 年を超える大銀杏です
打つ手もなく見守っているだけですが ・・・
大地も生き物も
この衛星の深く病んでいることを知らされています

・・・こぼれて匂へ　けうの形見に

梅も桜も精いっぱい咲いて 散っていきました
よく咲いてくれたね　綺麗だったよ・・・

そこを終の生き場所として
懸命に咲き　いさぎよく散り　再生に萌える・・・
無心なれば　迷いも 憂いもない
その飾らぬ謙虚さ　清々しさ
人間など とうてい及ぶべくもなし
一木一草　まさに師です

添うべく者を亡くして半年
きょうの形見に と懸命に習った
数々の習い事も半ばに 逝った者の無念さ
残った者のわびしさ
この境地の底知れぬ深さにふるえます

こぼれて匂うほどの
華やかな成果を上げる人は数々あれど
縁の無かった自分の生涯
愚鈍な己でも歳月を経て知ることがあります
ほんのひと時だった人生
それも様々なご恩に生かしていただいたもの
されど 生き様を顧みれば身のすくむ想い
仏法に深く問うたらば 見えたはずの道の数々
引き返せぬこの道

挫折 屈辱　苦悩
どれも味わい尽くした負の形見
誰にも渡せぬ遺産です
残す物はなくても
ご恩返しの一つくらいは と思いあぐねる日々
河を渡る前に・・・

たがために　あすは散りなん 山桜
こぼれて匂へ　けうの形見に

万葉歌人・清原元輔が歌に込めたもの・・・
日々の己を重ねると
とても重たい問いが返ってきます